

隱 地 上 組 遺 跡

——庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業(木戸工区)
に伴う発掘調査報告書——

1 9 8 4

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は昭和58年8月から昭和58年12月初旬まで実施した庄原市木戸町隠地上組所の隠地上組遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は（財）広島県埋蔵文化財調査センターが広島県庄原農林事務所から委託を受けて実施した。
3. 本書の執筆は沢元保夫（I）と平林工（II～V）が分担し、両名が編集した。
4. 出土遺物の実測・写真撮影・整図等は沢元、古瀬裕子が行った。
5. 本書に使用した遺構の表示は、S Bが住居跡、建物跡、S Dが溝、S Eが井戸状遺構、S Kが土塙、S Xがその他の遺構である。なおPは柱穴である。
6. 出土遺物のうち断面黒ヌリは須恵器、白ヌキは弥生土器、土師器、土師質土器、アミ目は陶磁器類である。
7. 第1図は国土地理院発行の1:50,000の地形図（上布野・三次）を使用した。

目　　次

I.はじめに	1
II.位置と環境	2
III.調査の概要	6
IV.遺構と遺物	8
V.まとめ	33

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3	第21図	S X 1 実測図	20
第2図	遺跡周辺地形図	4	第22図	S X 1 出土遺物実測図	20
第3図	遺跡周辺地形図	6	第23図	S X 2 実測図	21
第4図	造構配置図	折込	第24図	S X 2 出土遺物実測図	21
第5図	S B 1 実測図	8	第25図	S X 3 実測図	22
第6図	S B 1 出土遺物実測図	9	第26図	S X 3 出土遺物実測図	22
第7図	S B 2 実測図	10	第27図	IV区出土遺物実測図	23
第8図	S K 1 実測図	10	第28図	S B 5 実測図	23
第9図	S K 1 出土遺物実測図	11	第29図	S B 5 出土遺物実測図	24
第10図	S K 2 実測図	11	第30図	S X 4 実測図	25
第11図	S K 3 実測図	11	第31図	S X 4 出土遺物実測図	25
第12図	I 区出土遺物実測図	12	第32図	S K 5 実測図	26
第13図	S B 3 実測図	14	第33図	S K 6 実測図	26
第14図	S B 3 出土遺物実測図	15	第34図	S K 6 出土遺物実測図	27
第15図	S D 1 実測図	16	第35図	V 区出土遺物実測図(1)	27
第16図	S D 1 出土遺物実測図	17	第36図	V 区出土遺物実測図(2)	29
第17図	S K 4 実測図	18	第37図	S E 1・S K 7 実測図	30
第18図	III区出土遺物実測図(1)	18	第38図	S E 2 実測図	31
第19図	III区出土遺物実測図(2)	18	第39図	S X 5 実測図	32
第20図	S B 4 実測図	19	第40図	VI区出土遺物実測図	32

図 版 目 次

図版 1	a 遺跡遠景（北より）		図版 5	a III区南西半部完掘状態（東より）
	b 遺跡近景及び調査状況			b S B 3（北西より）
図版 2	a I区東半部完掘状態（東より）		図版 6	a S D 1 土層断面図（東より）
	b S B 1（北より）			b S D 1（西より）
図版 3	a S K 1（北東より）		図版 7	a S D 1 集石及び遺物出土状態（南より）
	b S K 2（北より）			b III区北東半部完掘状態（北東より）
図版 4	a I区西半部完掘状態（西より）		図版 8	a IV区北半部完掘状態（北より）
	b II区完掘状態（南より）			b IV区南半部完掘状態（北西より）

- 図版9 a SX1 (南より)
b SX2 (北東より)
- 図版10 a SB4 (北西より)
b SX3 (北西より)
- 図版11 a V区北西半部完掘状態 (北西より)
b 調査状況
- 図版12 a SB5 (南より)
b V区柱穴群 (北東より)
- 図版13 a SK5 (北西より)
b SK6 (南より)
- 図版14 a V区南東半部完掘状態 (南東より)
b SX4 (南西より)

- 図版15 a VI区北西半部完掘状態 (北西より)
b SE2 (北より)
- 図版16 a SE1・SK7調査状況 (東より)
b SE1・SK7 (東より)
- 図版17 a VI区南東半部完掘状態 (北西より)
b SX5 (北西より)
- 図版18 各造構出土遺物
- 図版19 I区・III区・IV区出土遺物
- 図版20 V・VI区出土遺物

I. はじめに

本報告は、庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業（木戸工区）工事に係る隠地上組遺跡の発掘調査報告書である。

広島県北部の庄原市周辺は三次市などと共に県の主要農業地域の一画を形成しているが、その農業立地条件は良好なものと言い難く、農業基盤の整備も不十分な状況とみられている。そこで広島県は庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業を計画・立案した。この事業は、庄原市域の900.3ha、869戸の土地基盤と生活環境の整備を実施し、近代的かつ合理的な農業・農村の実現を図ろうとするもので、その中心をなす事業が昭和の条里制とも称される圃場整備事業である。このため、圃場整備と合せて行なわれる用水施設・農道整備を含めた事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて事業主体である広島県庄原農林事務所（以下庄原農林）と広島県教育委員会（以下県教委）との間で昭和55年度以来協議が行なわれ、昭和57年度には本郷工区内の滑谷遺跡、上組遺跡の発掘調査が実施された。

木戸工区（70ha）内の文化財の取扱いについては、昭和55年10月庄原農林より県教委に対して文化財の有無ならびに取扱いについての協議があった。これをうけて県教委は現地の踏査及び試掘調査を実施し、事業地内に古墳・古墓など4遺跡、地区外に2遺跡の所在を確認した。その取扱いについて協議を重ねた結果、木戸町塙田所在の塙田古墓については地区外とすることとし、隠地上組遺跡・矢野谷古墳・土橋上古墓の3遺跡について事前の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和50年の農林省と文化庁の間でかわされた覚書に基づき発掘調査費のうち事業者負担分の90%については、事業者の庄原農林が^聞広島県埋蔵文化財調査センターと委託契約を結び隠地上組遺跡を調査し、農家負担分の10%については県教委が文化庁の補助金を受けて広島県立埋蔵文化財センターが矢野谷古墳・土橋上古墓の調査を実施した。

なお、隠地上組遺跡の調査にあたっては地権者である渡辺忠美、梶原治宗両氏のほか、木戸工区長井田節氏をはじめとする地元木戸町の方々、広島県庄原農林事務所、庄原市教育委員会、広島県教育委員会から多大な協力を得た。記して感謝の意を表するものである。

II. 位置と環境

庄原市は広島県の北東部に位置し、気温較差の大きい盆地特有の気候を示す。今回調査した隠地上組遺跡は庄原市域の南西端、木戸町隠地上組に所在し、三次市に隣接して位置する。

庄原盆地を北東から南西に流れる国兼川は、多くの小支流を集めながら流下し、塩町付近で馬洗川に合流する。本遺跡はこうした小支流の一つである木戸川が形成する開析谷の一画、やや小高いところに位置し、標高231~233m、木戸川との比高差は約10mを測る。遺跡周辺の標高200~250m前後の低丘陵上には多くの古墳群が存在し、丘陵間の谷間の谷部には谷水田が発達している。

從来、庄原市は備北地域において隣接する三次市と並ぶ古墳の密集地としてのイメージが強く、生活関係の遺跡については不明な点が多かった。しかし、これも近年の調査により次第に解明されつつある。

まず旧石器時代についてみると、新庄町小和田遺跡から槍先型尖頭器が出土している。縄文時代では門田町筆淵遺跡、本村町大原1号遺跡から土器片が出土しており、当時の人々の生活の痕跡を認めることができる。しかしこれらは遺構に伴うものではなく、詳細については不明な点が多い。

弥生時代になると遺跡は増加の傾向をたどる。まず、西山遺跡では前期後半の土塙2基が検出されている。中期になると七塚町蜂原遺跡で塩町式併行（中期末葉）の土器片が表採されているほか、本村町大原1号遺跡で2軒の住居跡が検出されている。隠地上組遺跡のSB5などもほぼこの時期に比定される。後期では七塚町大唱山遺跡で初頭の住居跡1軒、同じく新庄町西山遺跡で住居跡1軒が検出されているほか、水宗町妙見山遺跡においても同期の土器片が採集されている。その立地からみて、この時期の集落は数軒を単位とし、盆地の縁辺部や丘陵間の谷水田の経営に力が注がれていたものと推定される。

同時代の墳墓としては、平面が四隅突出型を呈し列石と貼石で墓域を区画した山内町田尻山1号方形墓がある。備北地域における類例としては三次市宗祐池西遺跡の1号方形台状墓、花園遺跡などがある。これらは数基の主体部を有することから家族墓としての性格が考えられ、すでにこの時期から集団内における支配者層の台頭を窺う



1. 隠地上組遺跡
2. 大唱山古墳群
3. 田尻山古墳群
4. 孤塚古墳群
5. 隠地上組古墳群
6. 矢野谷古墳
7. 木戸下古墳群
8. 大仙山古墳群
9. 野曾原北古墳群
10. 仮屋追北古墳群
11. 西ヶ迫古墳群
12. 羅漢古墳群
13. 尾越古墳群
14. 国広古墳群
15. 上組遺跡
16. 亀井尻窪跡
17. 寺町庵寺
18. 甲山城跡
19. 滑谷追跡
20. 萩城城跡
21. 向城跡
22. 森高城跡
23. 岡の壇城跡
24. ニッ山城跡
25. 国広山城跡

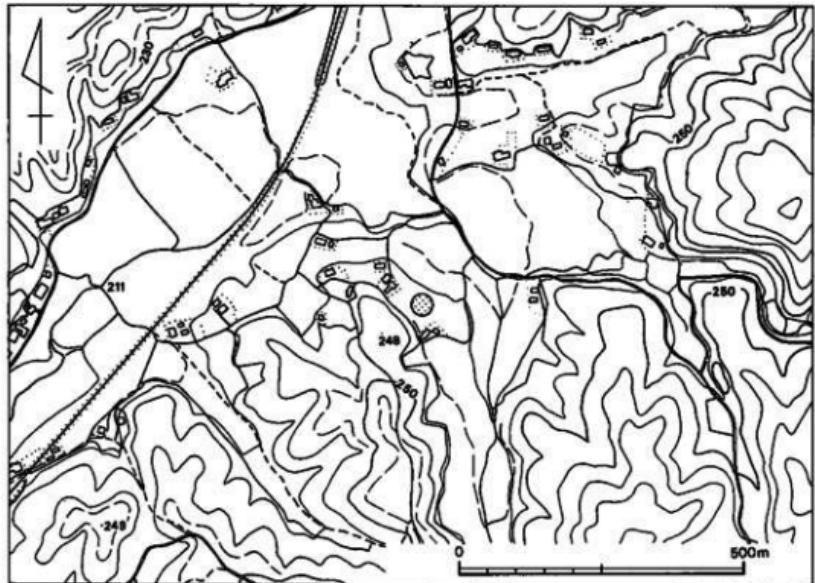
第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

ことができる。

古墳時代になると遺跡の数は急激に増加する。その殆どは古墳であるが、集落跡についても近年の調査により古墳時代後期のものを中心として資料が増加している。

早くは、昭和31年に本村町鍬寄遺跡で中期の住居跡の存在が確認されている。集落内より鍛冶関係の遺構が検出された遺跡としては、三日市町大成遺跡、川西町境ヶ谷遺跡、本村町牛乗遺跡などがある。これらは備北地域における山砂鉄を利用した鉄生産との関係で注目されるものである。ほかに新庄町西山遺跡・永宗遺跡、本郷町上組遺跡では掘立柱建物も検出されており、これらは古墳時代の住居様式の多様性を物語るものといえよう。

古墳についてみると、国兼川・西城川・本村川といった主要水系及びそれらに注ぎ込む小支流に沿って、数基から10数基のグループごとにまとまりをもって分布していると考えられる。国兼川の両岸には径24.6mの大型円墳を中心に14基の円墳から形成される山内町田尻山古墳群、全長17mの前方後円墳を中心に14基の古墳群から形成さ



第2図 遺跡周辺地形図

れる三次市和知町羅漢古墳群をはじめとして、西ヶ迫古墳群、尾越古墳群、国広古墳群などが分布する。木戸町周辺に限ってみても、周囲の谷水田を臨む低丘陵上に、全長20mの前方後円墳を含む11基からなる大仙山古墳群、木戸下古墳群、隠地上組古墳群などが連綿と當まれている。

奈良時代では、西城川左岸、宮内町隠地の小丘陵麓に複弁蓮華文軒丸瓦を出土した伝神福寺跡が存在する。この寺跡から南西2.5kmには、県史跡亀井尻窯跡がある。昭和40年の調査により平面杓子形、奥壁部から焚口までの長さ3.2m、幅2mの平窯が検出されている。

中世になると山内町・木戸町の一帯は地毘莊と呼ばれ、地頭として山内氏が甲山城を本拠として勢力を拡げていた。また、周辺では広沢氏が和智氏と江田氏に分れ、各々本城を中心としてその一族・家臣により多くの出城・支城が築かれている。本遺跡周辺についてみると、甲山城を中心に階段形式の葛城城・丘陵先端に位置する向城や丘陵上の岡の壇城がある。これらは山内氏が地毘莊の西方を防備するとともに西進の拠点として築城したようである。また隣接する三次市和知町尾越には和智氏一族の城跡とみられる二ツ山城があり、さらには出雲の尼子氏の築城かと推定される国広山城が存在することからもわかるように、この地域は山内氏にとって所領の確保と進出に重要な役割を果たした地域と考えられる。

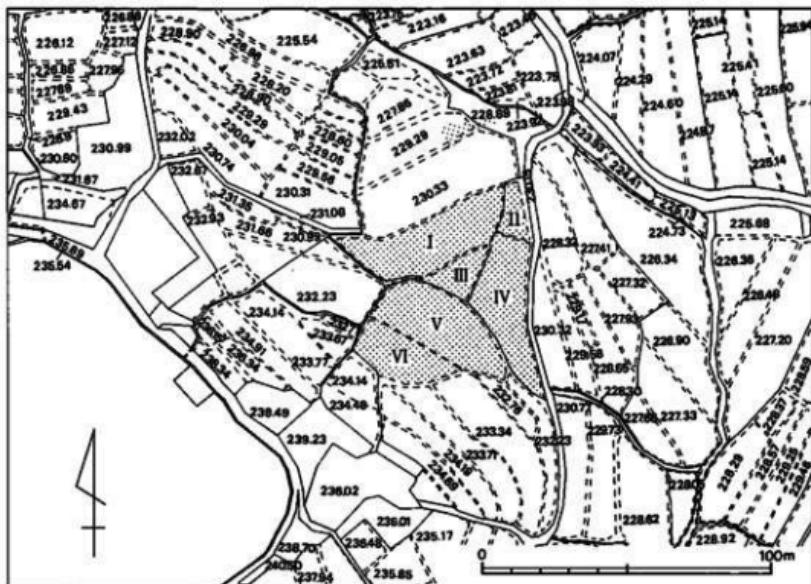
引用・参考文献

- 潮見浩「庄原市域の遺跡・古墳」『広島県文化財ニュース』第24号 1964年
庄原市文化財保護委員会「庄原市の文化財」1971年
広島県教育委員会「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
原田隆雄・服部宣昭「庄原市における考古学的遺物・遺跡(弥生・古墳・古瓦)見てあるき」
『庄原格知』第5号所収 1979年
広島県「広島県史」考古編 1979年
広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「西山・小和田・永宗」1982年
広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷遺跡群」1983年
広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「滑谷遺跡」1983年

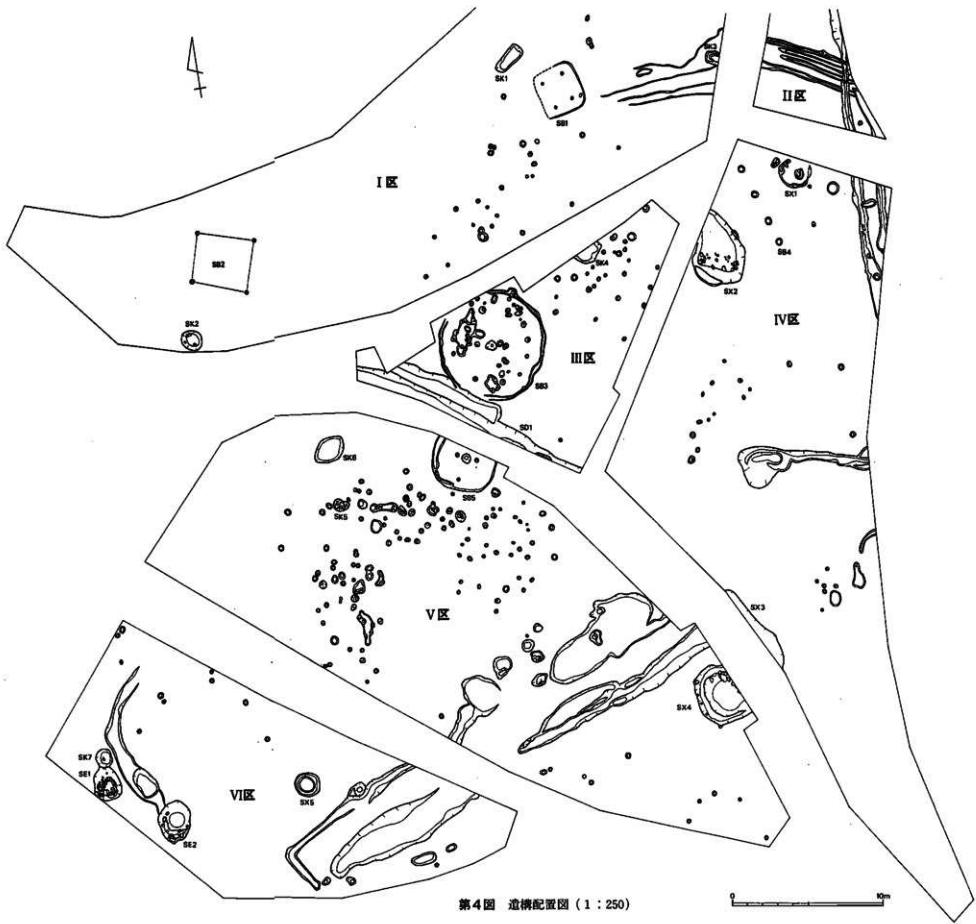
III. 調査の概要

隠地上組遺跡は庄原地区圃場整備の木戸工区に係る分布・試掘調査により発見されたものである。試掘調査では木戸川左岸、やや高所に位置する谷水田に15本のトレンチを入れた。その結果、北側のトレンチにおいて住居跡（SB1）、柱穴を確認したほか、南側において柱穴及び須恵器片を検出したため、その範囲を遺跡として認定し本調査に臨んだ。調査は8月1日から12月9日まで、調査総面積は約2,500m²である。

木戸工区の圃場整備は昭和61年度頃に予定されており、調査区域の水田もそれまで耕作が行なわれるため調査の方法自体にもおのずから規制が生じた。すなわち、調査後の埋戻し及び調査区域の各水田間のレベル差が50cm前後もあるため、排土の問題などから調査範囲を一度に掘下げることは困難と考えられた。このため1枚の水田を半分ずつに区画して掘下げ、調査終了時点で埋戻しを行なった後、残りの半分を調査するという方法をとった。



第3図 遺跡周辺地形図 (アラビア数字は標高)



第4図 造構配図 (1:250)

調査区の設定は、便宜上、各水田ごとに北から I・II……VI区とし、各区の半分をそれぞれ A・B区と分けて調査区を表すことにした。たとえば、I-A区・IV-B区というように表現した。

試掘トレンチの土層断面の検討により本遺跡の基本層序は耕作土→床土→黒ボク→茶褐色土→黄褐色土という層序であることが確認された。SB1は茶褐色土、他の柱穴群は黄褐色土より掘込まれており、この両者を地山と考え調査を進めた。

まず、耕作土を重機を使って除去するとともに、V・VI区の旧水田整地時の客土と考えられる土についても排土を行なった結果、耕作土を除去する際に磨滅した須恵器・土師質土器が出土した。またV・VI区の旧水田整地層の存在から遺構はかなりの削平を受けていることが予想された。

ついで、床土面から遺構の精査、検出を試みた。遺構は殆どの調査区でこの床土除去後の茶褐色土及び黄褐色土上面において確認されたが、I-A・VI-B・V-A北部・V-B南東部においては床土下に黒ボクが最深部で約1mの厚さで堆積している。地山面は調査区中央より北西と南東に向かって緩やかな谷状となって傾斜しており、その傾斜角度はそれぞれ3°と4°を測る。この黒ボク上層より弥生時代中期末葉を中心とする土器が出土しているが、黒ボク上面では何ら遺構を検出することができず遺物包含層と考えられる。

また、遺構の削平に加えて各地区にみられる近・現代の水田耕作にかかる擾乱が著しく、性格不明のものも多いため遺構の検出・確認は困難をきわめた。さらに西側の谷部になるところでは湧水が多く、調査を一層困難なものにした。

以上の調査により検出した遺構には次のようなものがある。住居跡5（竪穴式住居3・掘立柱建物2）、土塙7、溝状遺構1、井戸状遺構2、その他の遺構5、多数の柱穴群などである。

なお、各調査区で検出した径20~30cmの柱穴については、その埋土を記録し建物の規模等について考察を試みたが、柱穴相互の有機的関係をつかむことができなかつた。以下、I区から順に遺構、遺物の概略を述べていきたい。

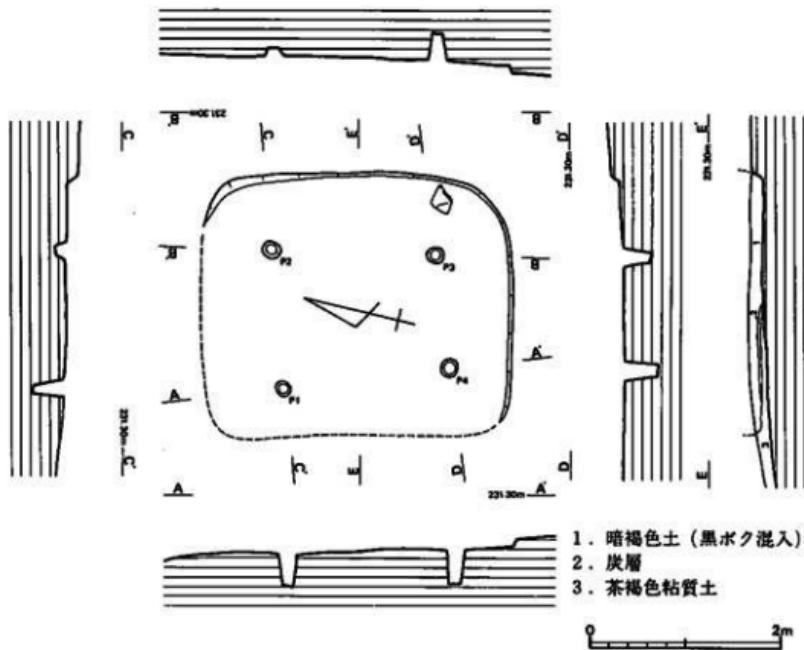
IV. 遺構と遺物

I 区（第4図、図版2-a・4-a）

遺跡の北端に位置し、中央から西にかけては谷状となって緩かに傾斜する。I区検出の遺構としては、住居跡2軒（SB1・2）、土塹3基（SK1・2・3）のほかに、ピット群がある。ピット群は調査区の中央から南寄りのあたりに集中してみられ、径20~30cm、深さ20cm前後のものが殆どである。中には備前焼の甕が出土したものもあるが、各ピット間の関係については不明である。

SB1（第5図、図版2-b）

調査区中央よりやや東寄りに位置する。住居跡の位置するあたりから西にかけては



第5図 SB1実測図

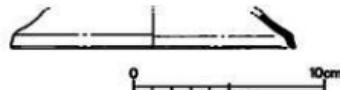
茶褐色土の地山面が緩かに傾斜するため遺存状態が悪く、西壁及び北壁はプランにおいて確認することはできなかった。平面プランはやや南北に長い隅丸方形を呈し、東西2.8m、南北3.3mを測り、床面積は約9m²になっている。長軸の南北方向を主軸と考えるとN-14°-Wをとる。壁高は最大の東側で13cmを測り、75°の傾斜角度をもっている。床面中央から西にかけては約4cmの厚さで焼土及び炭化物が検出されており、床面は赤変して熱を受けた痕跡がみられたが、炭化材はみられなかった。壁溝及び炉跡と考えられるものは存在しない。主柱穴はP1~4の4本である。P1：径16cm、深さ34~36cm、P2：径20cm、深さ12cm、P3：径20cm、深さ28~30cm、P4：径20cm、深さ38cmである。柱穴中心間の距離は、P1-2：1.43m、P2-3：1.72m、P3-4：1.18m、P4-1：1.74mを測る。P1・3・4が床面より35cm前後の深さで掘込まれているのに対し、P2は約20cmも浅くなる。いかなる理由によるものか不明であるが、住居のプラン及び柱穴の位置から主柱穴と考えておきたい。なお、南東のコーナー部分の床面からは24cm大の角礫が検出されたが、使用痕もなく何の理由で置かれたものか不明である。埋土は暗褐色土に黒ボクが混っており須恵器片が出土したが、床面からの遺物は出土していない。

出土遺物（第6図、図版18）

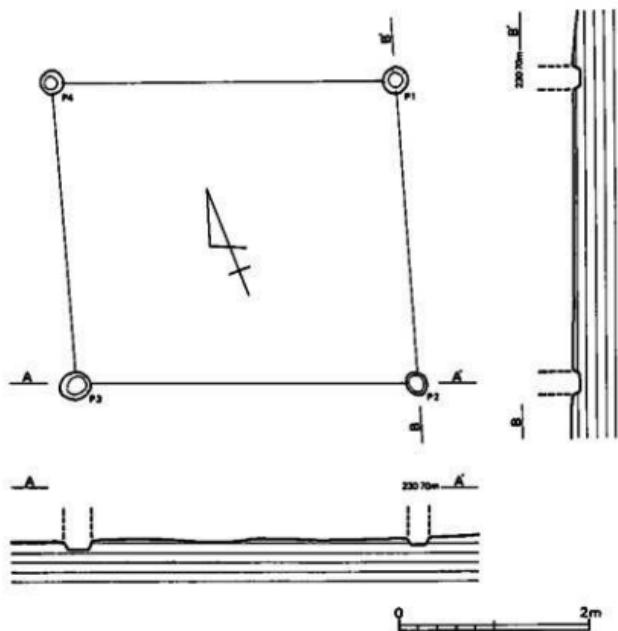
須恵器杯蓋で口径14.8cmを測り、天井部につまみの付くタイプと思われる。体部は直線的に下がり口縁部との境に稜をなし、口縁部は下外方に下がる。色調は淡灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

S B 2（第7図）

調査区の西寄りに位置する1間×1間の掘立柱建物で、東西方向に少し長い。谷部の黄褐色土上面で検出したため遺存状態は非常に悪く、本来の掘込み面は黒ボクかその上層からと考えられる。P1-4を結ぶ軸線はN-23°-Wを指向する。P1は径36cm、深さ8cm、P2は径28cm、深さ8cm、P3は径30cm、深さ12cm、P4は径24cm、深さ12cmである。柱穴中心間の距離はP1-2及びP3-4は3.2m、P2-3及びP1-4は3.6mを測る。柱穴内埋土は黒ボクの単一層であり、遺物はP3底面より少量の土師質土器片を出土したのみである。



第6図 SB1出土遺物実測図

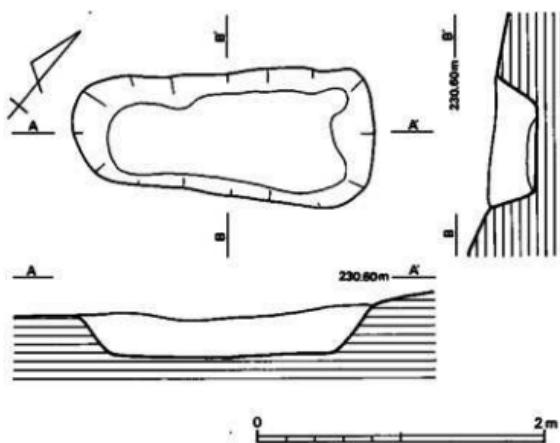


第7図 SB 2 実測図

SK 1 (第8図、

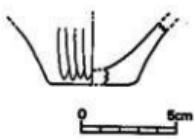
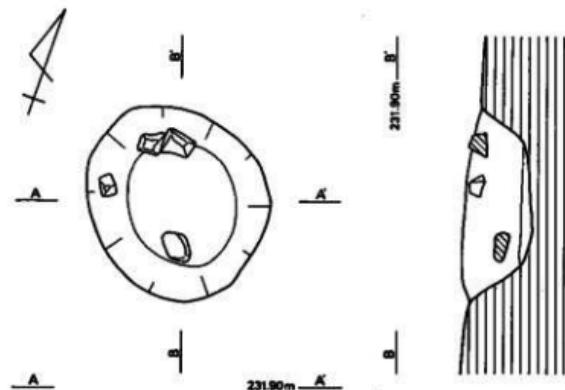
図版3-a)

SB 1の北西1.5
mに位置する。緩斜
面の黒ボク下で検出
し、平面形は隅丸長
方形を呈し、北東で
やや幅が広くなる。
長さ2.1m、幅0.75
~0.95m、深さ0.34
mを測り、底面は水
平で、主軸はN-48°
-Eを指向する。埋



第8図 SK 1 実測図

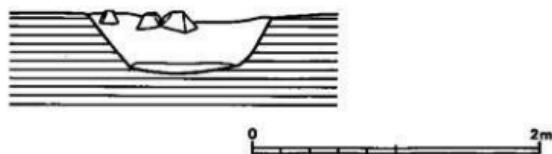
土は黒褐色でやや粘質を帶びており、弥生土器片が出土した。



第9図 SK 1出土
遺物実測図

出土遺物（第9図、
図版18）

底径 4.6cm の弥生土
器で、平底となる。外
面は縦位のヘラ磨き、
底部内面はナテ調整で、
色調は淡黄褐色で、胎
土・焼成とともに良好で
ある。



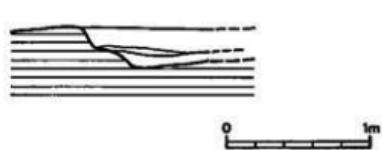
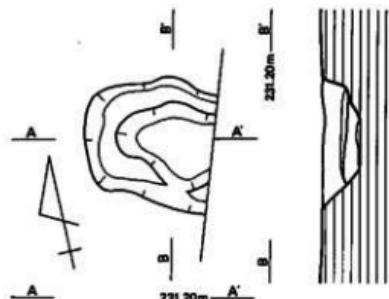
第10図 SK 2実測図

S K 2 (第10図、図版3-b)

S B 4 の南に位置し、黄褐色土上面で検出
した。平面形は径 1.4 m の円形で、深さ 0.44
m を測る。埋土は黒ボク一層のみであり、底
面より浮いた状態で 20 cm 前後の角礫がみられ
た。S B 4 と同様、本来の掘込み面は黒ボク
かその上層からと思われる。遺物は出土して
いない。

S K 3 (第11図)

調査区の東端に位置し、東にのびて畦の中
で完結する。完掘できなかったのでその平面
形は明らかではないが、ややいびつな長方形
を呈するものと考えられ、二段掘りとなつて



第11図 SK 3実測図

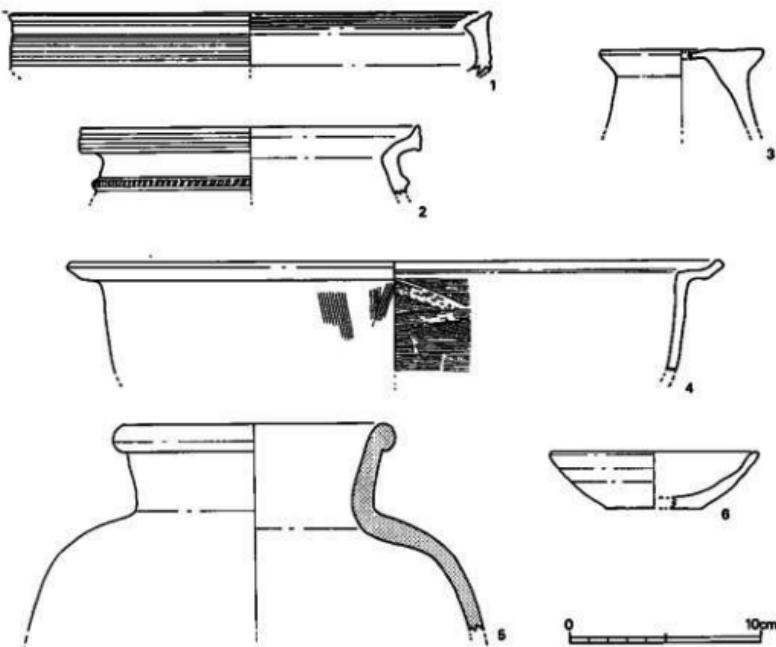
いる。確認範囲では長さ 0.9m 以上、幅 0.85m、深さは地山面からテラス面まで 0.18m、底面まで 0.26m を測る。東西方向を主軸と考えると方位は N-71°-W をとる。埋土は暗褐色土で遺物は出土していない。

I 区出土遺物（第12図、図版19）

1～3 は調査区西側の黒ボク上層出土の弥生土器、5 は南側ピット出土の備前焼、4～6 は耕作土からの土師質土器である。

1 は口径 25.2cm を測る高杯の口縁部である。口縁部は内傾気味に折り曲げ、端部は内外に拡張し、上面に 3 条・外面に 5 条の凹線をめぐらす。内外面ナデ調整、色調は淡黄褐色を呈する。

2 は口径 17.6cm の斐形土器である。口縁部は上下に短く拡張し外面に 2 条の浅い凹線をめぐらす。「く」字状に折曲げられた頸部には貼付けによる凸帯をもち、ヘラ状工具の押圧による刺突文を配する。内面ナデ調整、色調は淡黄褐色を呈する。



第12図 I 区出土遺物実測図

3はつまみをもつ甕用の蓋で径8.6cmを測る。内外面ナデ調整で、上面には指頭痕がみられる。色調は淡赤褐色～淡褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

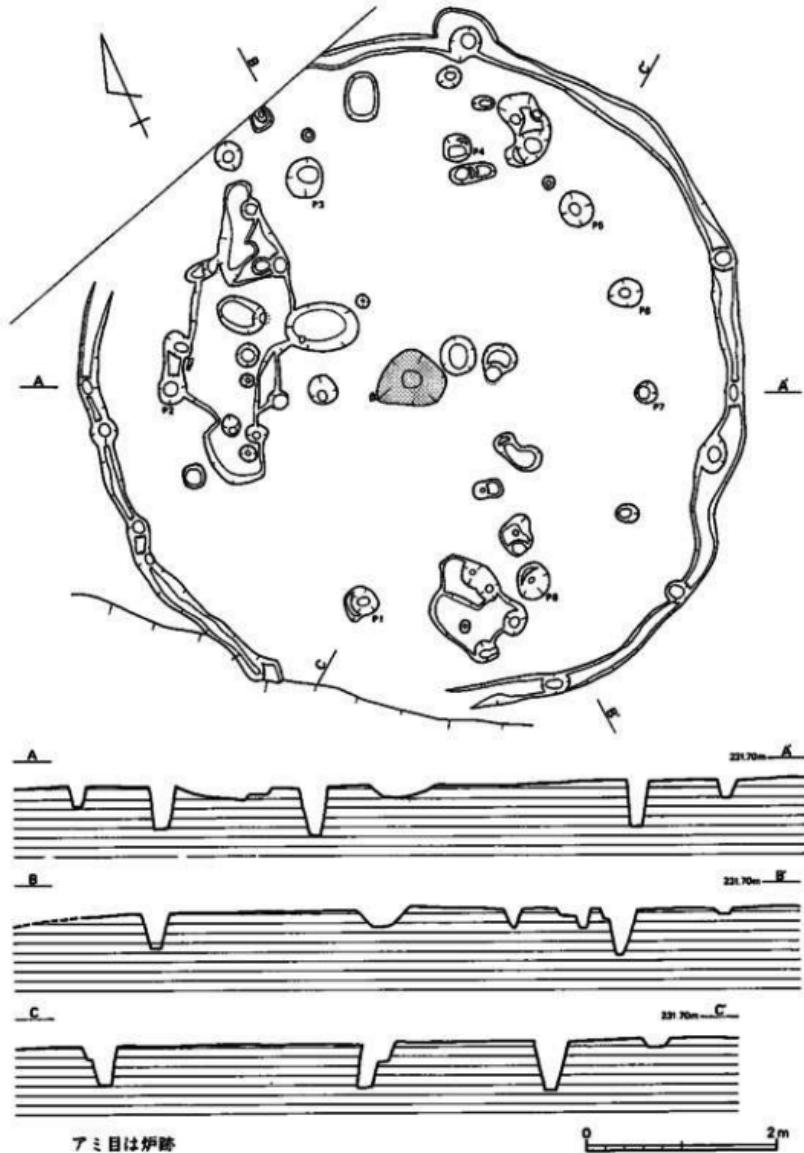
4は口径34.5cmの土師質土器鍋である。やや湾曲しながら上方にのびる体部より口縁部は直角に外反した後、斜め上方にのび、端部は矩形を呈する。内面横位・外面縱位のハケ調整、口縁端部は横ナデである。色調は内外面共黄褐色を呈し、外面には煤が付着する。胎土には1mm以下の長石・石英・雲母粒を含み焼成は良好である。

5は口径14.2cmの備前焼の甕である。口縁は外方へ折り返した玉縁状口縁をみせ、頸部は短く外反して肩につづく。内外面にナデ調整を施す。胎土は小砂粒を含む陶土で色調は茶褐色を呈する。頸部から肩にかけては釉が付着する。

6は口径10.8cm、器高3cmの土師質土器皿である。ヘラ切り調整の底部から外湾気味に立上る体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈する。胎土には1～2mm程度の石英・長石粒を含み、焼成は良好である。

II区（第4図、図版4-b）

遺跡の北東に位置し、約30cmの耕作土の下はすぐに黄褐色土の地山面となる。II区からIV区にかけては南北に走る幅50cm、深さ20cm前後の溝2本、東西に走る幅30cm、深さ10cm程度の溝4本のほか、径20cm前後のピットを検出した。なお、溝については水田耕作に係る攪乱と考えられる。II区からの出土遺物には少量の土師質土器片があるが、細片であり図示できるものはない。



第13図 SB 3 実測図

III区（第4図、図版5-a・7-b）

遺跡の中央部に位置し、I・II区造構面とのレベル差は約80cmを測りIII区が高い。III区検出の造構としては住居跡1軒（SB3）、溝1本（SD1）、土塙1基（SK4）、ピット群がある。調査区の北東部にあるピット群の中には径40cm、深さ50cm前後のかなりしっかりしたものもみられるが、相互の関係については不明である。

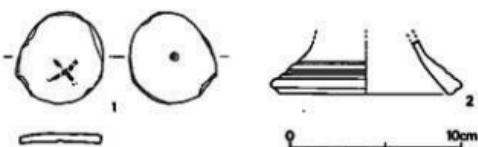
SB3（第13図、図版5-b）

調査区の南寄りに位置し、その南部分はSD1によって切られている。黄褐色土上面で検出したが、住居の壁は後世の削平を受けており壁溝が遺存するのみである。平面形は径7mの円形を呈し、床面積は約38.5m²となっている。壁溝は断面U字形を呈し幅16~40cm程度で、北側で消滅する。溝内には径20~40cm、深さ20cm程度のピットが計11本みられる。

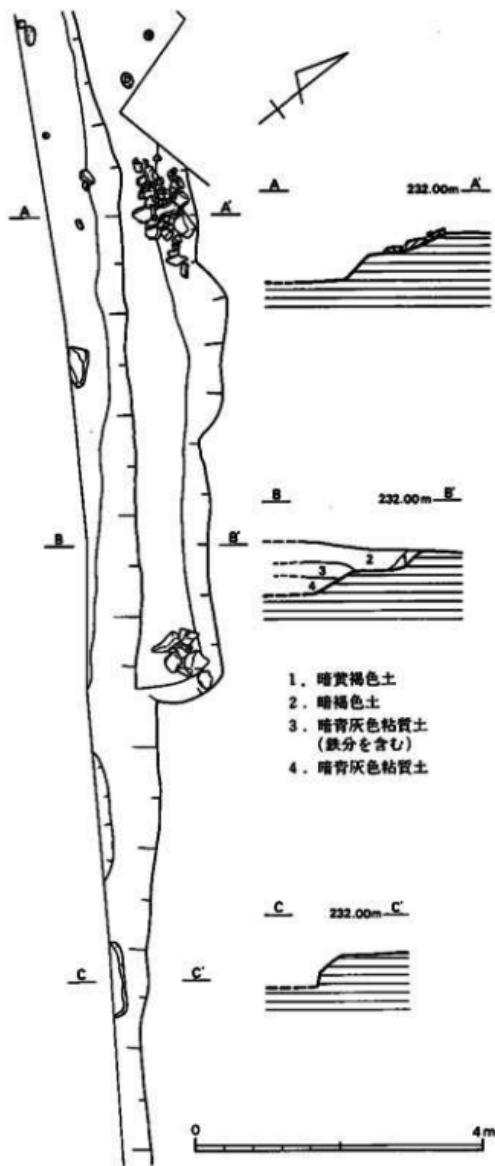
床面には多数のピットが存在し、後世のピットもあって、どれかSB3に伴うのか明らかではないが住居跡に伴う主柱穴としては（P1・2・3・4・7・8）、（P1・2・3・4・6・8）というグループが考えられる。柱穴の形状・位置及び建て替えの跡がみられないことから、主柱穴は前者のグループで6本柱と考えておきたい。床面中央には平面形が不整形を呈する60×70cm、深さ22cmを測るピットが存在する。埋土は暗褐色土中に焼土及び炭化物が含まれ、ピット内は熱を受けて赤変しており、炉跡と考えることができる。当住居跡に伴う遺物としては、P10出土の紡錘車、P9の西側の肩より出土した弥生土器がある。

出土遺物（第14図、図版18）

1は弥生土器片転用の紡錘車の未製品で、径4.3~4.8cm、厚さ0.4cmを測る。外面はヘラ磨きで、X印に条痕が付けられており、内面はヘラ削りとなっている。穿孔は貫通していない。2は弥生土器の高杯脚部である。外面には3条の凹線が施されており、脚端部は上方にわずかに拡張し1条の凹線を入れる。外面ナデ、内面ヘラ削りで、淡黄褐色を呈する。



第14図 SB3出土遺物実測図



第15図 SD 1 実測図

SD 1 (第15図、図版 6-b)

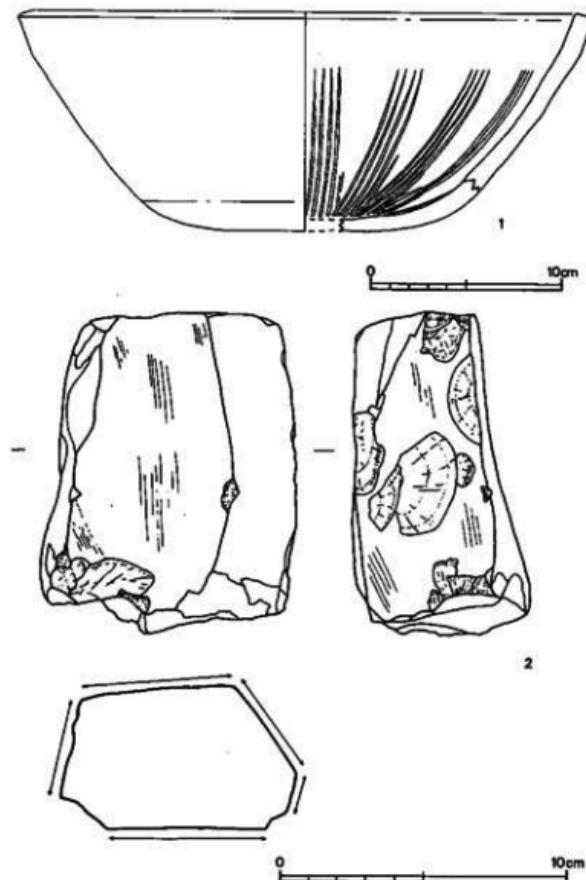
調査区の南端、SB 3 を切ってその南に位置し、尾根筋とは直交して東西に流走する。溝の西側は谷部に向って消えており、東側はV区の畦に沿って走り SX 4 に続くものと考えられる。溝の西半分では二段掘りとなっているが、南側は畦の中に入っているため幅についても不明である。確認範囲では二段掘りの部分で幅1.5m、造構検出面よりの深さ0.3~0.7mを測り、溝底はほぼ水平となる。土層断面の観察によると埋土の下層は暗青灰色粘質土となっており、本来溝が機能していた時点においては水が淀んだ状況であったことが考えられる。当溝への水の流入路としては尾根筋に水脈は存在せず西にゆるやかに傾斜する谷部に存在することから、造構西側からの流入と考えられる。なお、二段掘りとなっている部分の東側と西側においては拳大~人頭大の集石が存在し、中には赤変して熱を受けた形跡を窺わせるものもあった。また、溝底においても底面に密着した

状態で数個の礫が検出されている。東側の集石の間及び下より擂鉢の破片が出土しており、SD 1 もほぼ当該期のものと考えられる。ほかに出土遺物としては流入土からの磁石がある。

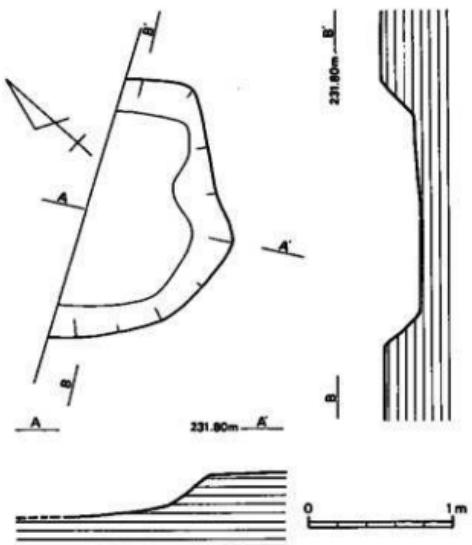
出土遺物（第16図、図版18）

1は擂鉢で口径30cm、器高11.4cmを測る。底部は丸底に近い平底を呈する。体部はやや内湾しながら斜め上方にのび、口縁端部は矩形を呈する。内面は5条を単位とするカキ目が下から上に向って入る。

風化が著しく調整は不明であるが、おそらくナデ調整であろう。内面は黄褐色～黒色、外面は茶褐色を呈し、煤が付着する。胎土は3mm程度の長石・石英粒を含んでおり、焼成はやや軟弱である。2は流紋岩製の磁石である。磁面は5面であるが使用頻度に差があり、非常になめらかな面と荒い面がある。長さ11.1cm、幅8.2cm、厚さ4.95cmを測る。



第16図 SD 1出土遺物実測図



第17図 SK 4 実測図

残る。長さ8.7cm、幅7.3cm、厚さ2.6cmを測る。1～3は土師質土器で、1の鍋は口径35.5cmを測る。口縁部は斜め上方に外反し、端部は肥厚する。内面横位、外面縦位のハケ調整で、黄褐色を呈する。2も鍋で口縁部は直角に外反した後、斜め上方に短くのびる。内面は横位のハケで、淡黄褐色を呈する。3は底径7.6cm

SK 4 (第17図)

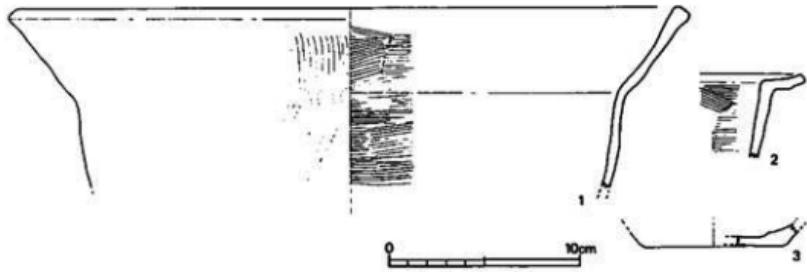
SB 3の北東に位置し、北側にのびる。平面形は不整形を呈し、東西1.8m、南北1m以上、深さ0.26mを測る。埋土は暗褐色土中に黄褐色土が混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。

III区出土遺物 (第18・19図、図版19)

砥石は砥面が3面で、よく使用されており、側面には溝状の使用痕が



第18図 III区出土遺物実測図(1)



第19図 III区出土遺物実測図(2)

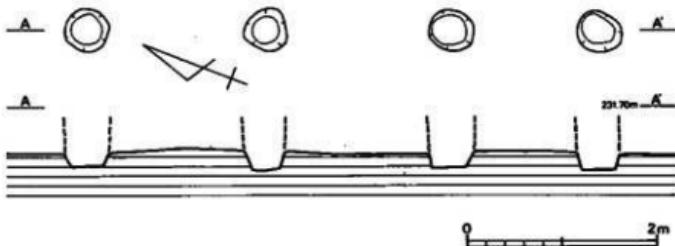
の皿で、底部ヘラ切り、内外面とも回転ナデ調整である。淡赤褐色を呈する。

IV 区（第4図、図版8-a・b）

遺跡の東端に位置し、遺構面はI・II区とはほぼ同レベルである。調査区の南側は緩かに傾斜し谷状を呈す。検出された遺構としては、掘立柱建物1軒（SB4）、その他遺構3（SX1～3）、ピット群がある。

SB4（第20図、図版10-a）

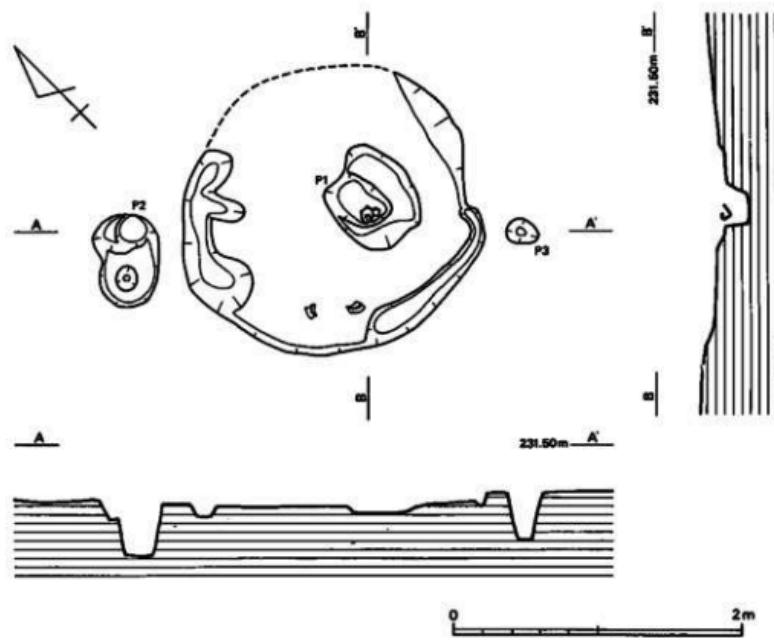
調査区の北側に位置する桁行3間の掘立柱建物の一部と考えられる。黄褐色土上面で検出したが、耕作による削平が甚しく、遺存状態は悪い。柱穴は径40cm、深さ10cm程度を測り、柱穴中心間は約1.8～2.0mである。柱穴からの遺物は出土していない。



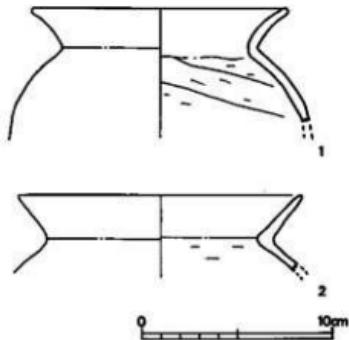
第20図 SB4 実測図

SX1（第21図、図版9-a）

SB4の北東1.5mに位置し、耕作土下約30cmの黄褐色土直上で検出した。遺構北東部分は削平により消滅しているが、平面形は約2.1mの円形を呈するとみられる。全体に残りが悪く、最も遺存度の良い南西壁で壁高5cmを測るのみである。床面には幅7～22cm、深さ8～10cmの浅い溝が西側で一部途切れながら廻る。中央には一辺60cmの円形ピット（P1）が存在し、東と南にテラス面をもちながら西側で深くなっており、規模は30×40cm、深さ22cmを測る。埋土は暗褐色土中に炭化物が混入しており、床面西側においても炭化物を検出した。なお、遺構の北西と南東では径20cm、深さ34～36cmのピット（P2・3）があり、SX1に付随する柱穴と考えることができる。柱穴中心間の距離は2.7mを測る。出土遺物としては、P1の底より約13cm浮いた状態で土師器1、P1より西へ約80cmの床面上から土師器2がある。



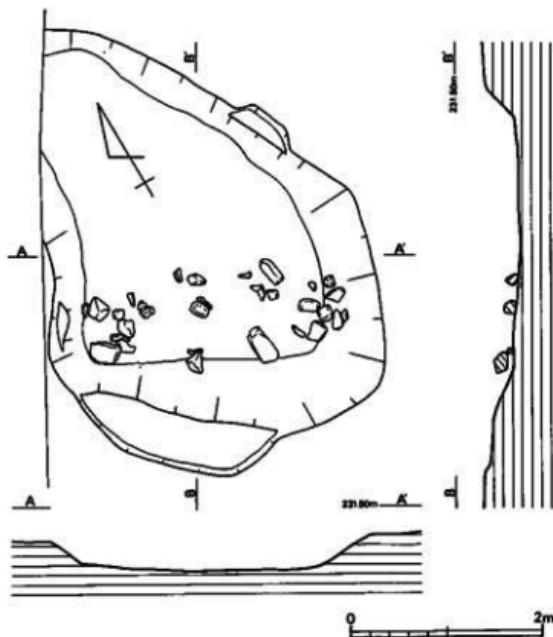
第21図 SX 1 実測図



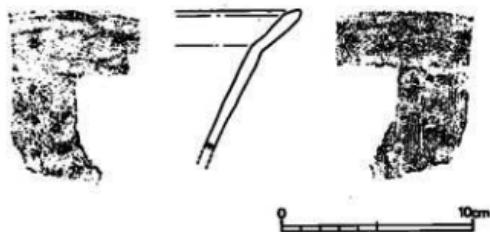
第22図 SX 1 出土遺物実測図

出土遺物（第22図、図版18）

土器 1は甕形土器で口径13.4cmを測り、口縁は「く」字状に折れて外湾気味に上方にのびる。口縁部内外面及び胴部外面はナデ調整、胴部内面は横方向のヘラ削りで、色調は淡黄褐色を呈する。胎土は1mm以下の石英・長石赤色砂粒を含み、焼成は良好で外面に一部煤が付着する。2は口径14.8cmを測る。口縁は「く」字状に折れてほぼ直線的に上方にのび、端部はやや先細り気味に丸く終わる。口縁部の中ほどにはかすかに稜線があり、内外面ともにナデ調整、頸部以下は横方向のヘラ削りである。色調は淡黄褐色で、胎土は1.5mm以上の石英・長石の赤色砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第23図 SX 2 実測図



第24図 SX 2 出土遺物実測図

S X 2 (第23図、図版9-b)
S B 4 の西 1.6m に位置する。遺構の北側部分の正確な規模は不明であるが、長軸 4.6m、短軸最大幅 3.5m、深さ 0.22 ~ 0.38m を測り、不整の平面形を呈する。南西部分には平面が台形状を呈し、検出面よりの深さ約 10cm の浅いテラス面を持つ。底面南側には拳大 ~ 人頭大の角礫が集中し、赤変して明らかに火を受けた痕跡をもつものが数点みられた。埋土は暗褐色土中に黄褐色土がブロック状に混入しており、人為的に埋められたものと考えられる。

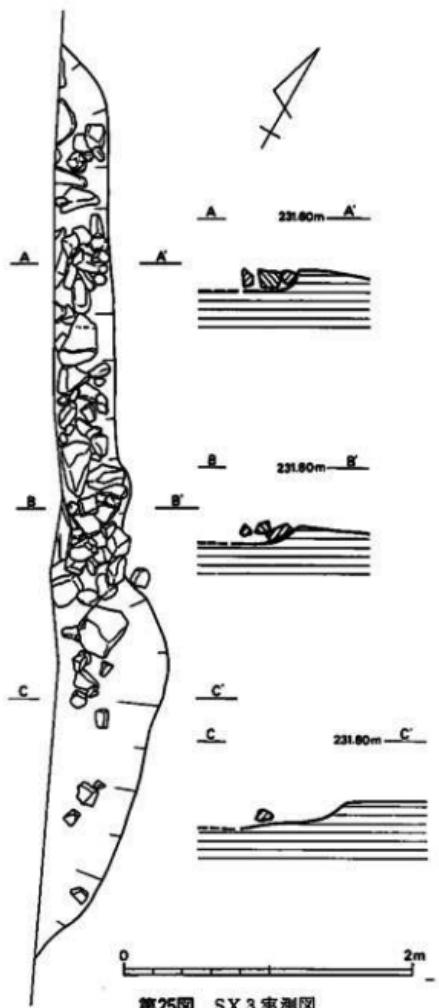
出土遺物 (第24図、図版18)

土師質土器鍋で、体部はほぼ直線的に立上り、口縁部は屈曲

して外上方に短くのび、端部は丸くおさめる。外面は縦位のハケ、内面は横位のハケ調整が施される。色調は内面黄褐色、外面黒褐色を呈し、外面には煤が付着する。

S X 3 (第25図、図版10-b)

IV区の中央部に位置し、遺構より南東にかけては緩かな谷状となって傾斜する。遺構は東側にのびて畦の中に入るため平面形の確認はできないが、現状で長軸 6.3m、



第25図 SX 3 実測図

は須恵器杯身で、口径 10.8cm、受部径 12.8cm を測る。受部はわずかに外方にのび、立上りは内反し端部は丸くおさめる。立上りはオリコミ手法で、回転ナデ調整である。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。3は貼付高台を有する杯身で、底径 9.5cm を測る。内外面とも回転ナデ調整で、淡灰色を呈する。4は「称符元宝」(1008) の銘をもつ北宋錢である。



第26図 SX 3 出土遺物
実測図

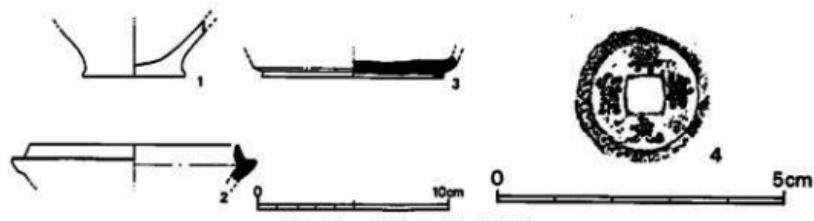
短軸 0.8m、深さ 0.3m を測る。遺構底面には拳大～人頭大の角礫が集中していた。埋土は黒褐色でやや粘質を帶びており、混入の弥生土器高杯が出土した。

出土遺物（第26図、図版18）

高杯の杯部である。やや外湾気味に上方にのび口縁部は肥厚し、外面に4条、口縁端部上面に3条の凹線をめぐらす。調整は不明であるが、淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好で、杯底部底面には赤色顔料がみられる。

IV区出土遺物（第27図・図版19）

IV区出土のものはすべて耕作土からのものである。1は弥生土器の底部で、底径 5.5cm を測り平底を呈する。内外面ともナデ調整で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。2



第27図 IV区出土遺物実測図

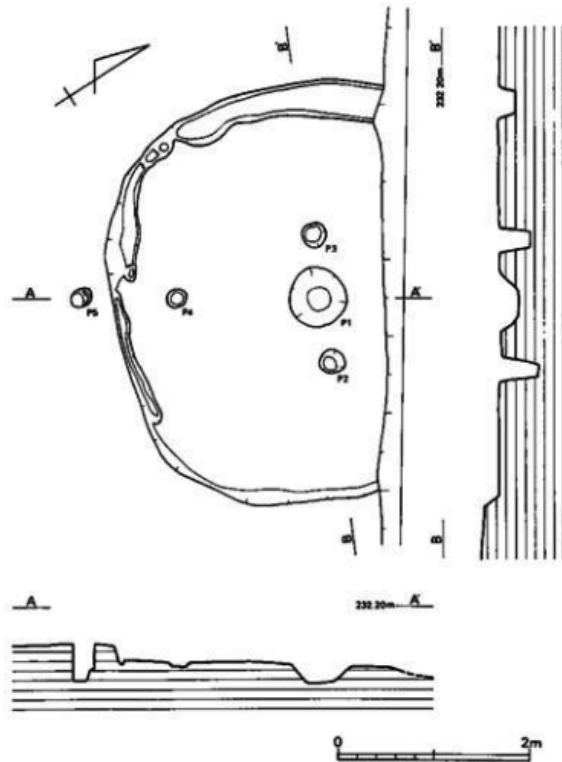
V区（第4図、図版11-a・14-a）

調査区の東と西は谷状となって緩かに傾斜しており、造構は調査区中央より西に集中して検出した。検出造構には、住居跡1軒（SB5）、土塙2基（SK5・6）、その他の造構1（SX4）

のほか、多数のピット群がある。ピット群は規模、深さともに様々であるが、径30cm、深さ50cm前後で根石を敷いたしっかりしたものもある。

SB5（第28図、図版12-a）

調査区の中央北側、SD1の南に位置する。平面プランは東西4.3mの円形に近い隅丸方形を呈するが、北側は削平によって遺存しておらず規模は不明である。現存する床面積は約7.6m²である。黄褐色土上面で検出された



第28図 SB5実測図

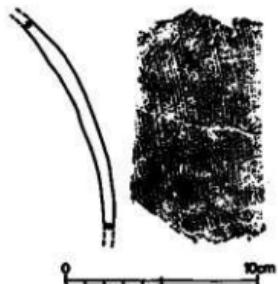
が遺存状態は悪く最大の南壁で16cmの壁高を測るのみである。南壁と西壁に沿って幅20~30cm、深さ5~16cmで断面U字形を呈す壁溝がめぐらされているが、東壁には存在しない。溝内には径12~20cm、深さ12cm程度のピットが3本みられる。主柱穴は2本で、中央の円形ピット(P3)を挟む位置にある。P1は径25cm、深さ40cm、P2は径25cm、深さ32cmを測り、柱穴中心間の距離は1.4mである。埋土は暗褐色土中に炭化物及び黄褐色土が混入していた。P1・2を結ぶ線を主軸と考えると、N-67°-Wをとる。床面中央のP3は径60cm、深さ30cmを測り、埋土は2層に識別できる。ピット内は熱を受けた痕跡は認められなかったが、下層は灰褐色を呈し炭化物を含んでおり、炉跡と考えられる。床面では踏み固められた痕跡・炭化物などは一切認められなかつた。なお、南側には径20cm、深さ5cmの浅いピット(P4)が存在するが、埋土の相違から住居跡に伴うものとは考えられない。遺物は住居内埋土より弥生土器片が出土しているのみである。

出土遺物（第29図、図版18）

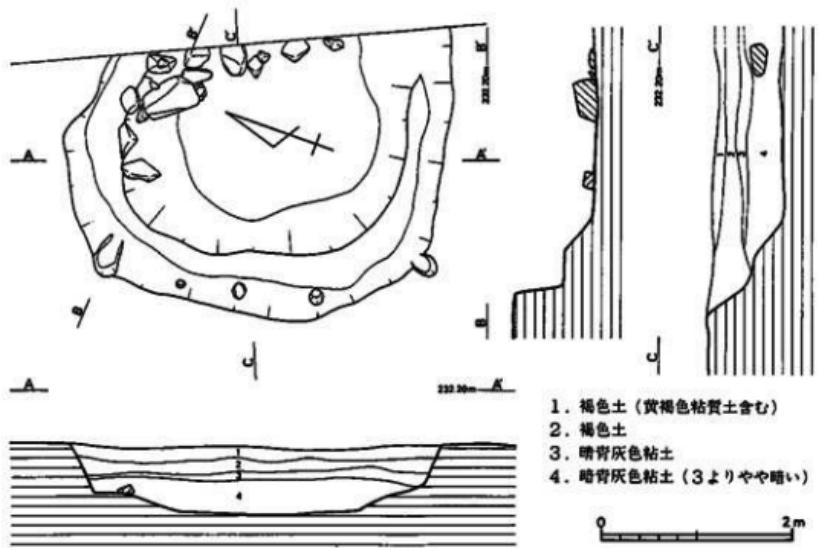
「く」字状に外反する口縁をもつ変形土器の上胴部で、頸部外面に櫛歯状工具による斜方向の刺突が配されている。外面は縦位のハケ、内面上半は斜方向のヘラ削りで、下半は横位のハケ調整である。色調は暗褐色を呈すが、部分的に黄褐色となる。胎土は1mm以下の石英・長石粒を含んでおり、焼成は良好である。

SX4（第30図、図版14-b）

SX3の南に位置し、黒ボク下の茶褐色土上面で検出した。遺構の南側は地山面が緩かに傾斜して谷部となる。東側は畦に向って延びるため約0.5m程度調査区を拡張したが、全体のプランを検出することはできなかつた。その平面プランは隅丸方形を呈し、確認範囲で3.9×2.9mを測る。遺構は二段掘りとなっており、最大幅0.45m、検出面よりのレベル差約0.5mのテラス面をもつ。このテラス面より底面にかけて中央より東寄りの位置で、55×35cmから挙大の角礫が検出された。埋土は4層に識別され、下層においては青灰色粘質土となっていることから水をためる機能を有していたものとも考えられる。角礫は殆どのものが遺構底面及びテラス面に密着した状態で検



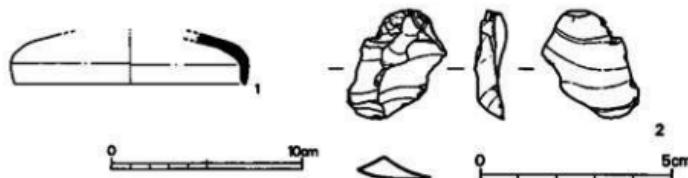
第29図 SB 5 出土遺物実測図



出されており、階段状施設の存在も考えられる。出土遺物は2層より出土した剝片及び須恵器があるが、当遺構に伴うものとは考えられない。

出土遺物（第31図、図版18）

1は須恵器杯蓋で口径12cmを測る。天井部より体部にかけては丸味をもち稜線は認められない。体部はやや内傾し、口縁端部は丸く終わる。回転ナデ調整で、色調は外面暗灰色、内面灰色を呈し、外面には自然釉が付着する。胎土には1mm以下の長石・石英粒を含み、焼成は良好である。2はメノウ製の剝片である。長さ3cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。背面端部には使用痕様の微細な剝離痕がみられる。



第31図 SX 4 出土遺物実測図

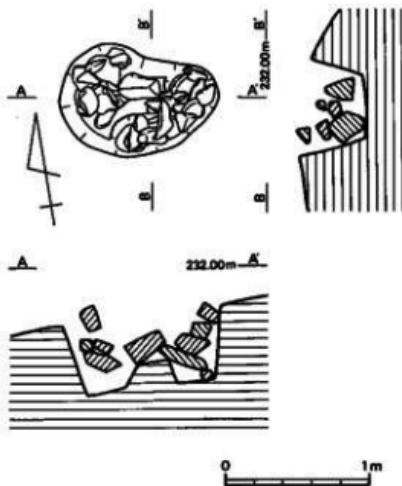
SK 5 (第32図、図版13-a)

SB 5の西方に位置し、北西に向って緩かに傾斜する茶褐色土上面で検出した。平面形は不整円形で、長軸1.1m、短軸0.65m、深さ0.5mを測り、断面は逆台形を呈する。土塙内には拳大～人頭大の角礫があり、この下から径0.2～0.4m、土塙底面からの深さ0.16～0.2mのピットを3本検出したが、これらが土塙に伴うものか重複関係をもつものかは不明である。遺物は出土していない。

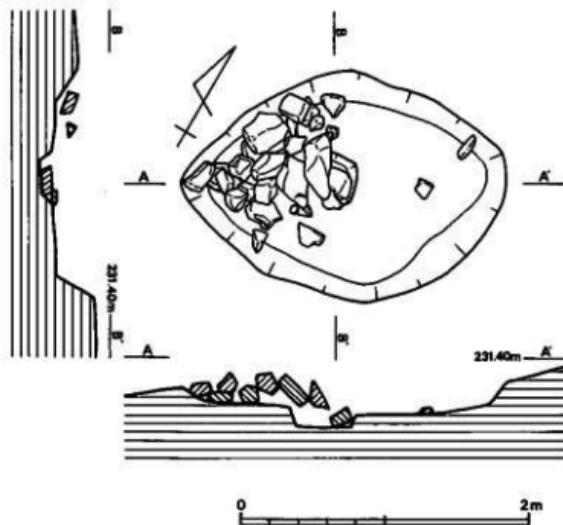
SK 6 (第33図、

図版13-b)

SK 5の北に位置する。平面形は橢円形を呈し、長軸2.26m、短軸1.6m、深さ0.33mを測り、断面は浅い皿状を呈する。南北側に拳大～人頭大の角礫があり、土塙中央からは $0.35 \times 0.45\text{m}$ 、底面からの深さ0.12mを測る方形ピットを検出した。なお、埋土は2層に識別されるが、その下層は暗青灰色粘質土となつており、水の作用を受けたことが考えられる。



第32図 SK 5 実測図



第33図 SK 6 実測図

出土遺物（第34図、図版18）

高台を欠失する伊万里系盃である。口径6.6cm、口縁部は外反し、器壁は肥厚しながら高台にいたる。

V区出土遺物（第35、36図、図版20）

第35図は調査区中央部から出土の石鎌で、石材は安山岩、長さ1.95cm、最大幅は基部にあり1.3cm、厚さ0.3cmを測る。表、裏ともに中央に大きな旧剥離面を残し、周囲に細かな調整を施している。

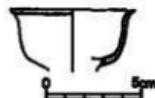
第36図の1～8は調査区東側と西側の谷部に堆積する黒ボク上層出土の弥生土器で、10～12は耕作土から出土した。

1は口径10.4cmの変形土器で頸部は短く「く」字状に曲り、口縁端部は上方に拡張して外面に3条の凹線がめぐる。胴部上半には4条以上の凹線を入れ間帯には斜向の割み目がめぐる。口縁部、頸部下内面ともにナデ調整で、色調は淡灰褐色、胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

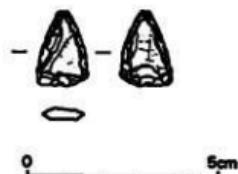
2は口径20cmの変形土器で口縁端部を上下に拡張し、外面に4条の凹線がめぐる。内外ともナデ調整で色調は外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

3は口径16.1cmの壺形土器で、頸部は細く紋られラッパ状に外反し、6条以上の凹線がめぐる。口縁端部は上下に拡張し、外面に2条、上下に3条の凹線がめぐる。

4は口径7.8cmの壺形土器で胴部最大径14.5cm、底径4.7cm、器高推定22.5cmを測る。頸部は細く紋られ直立気味となり突堤をめぐらし、口縁部は強く外反する。胴部最大径は器高の1/2以下にあり、全体にどっしりした感じを与える。外面の胴部最大径の上方には櫛歯状工具による刺突を2段にわたって施している。口縁部はナデ調整で、外面上胴部はハケ調整、下胴部の上方は横位、下方は縦位のヘラ磨きを施している。内面の下胴部はナデ調整で胴部最大径の付近は横位の細かいハケ調整がみられ、頸部は絞った後に上方にナデ上げている。底部は平底でナデ仕上げである。色調は内面灰色、外面黄褐色で胎土は1mm以下の石英・長石、雲母粒を含み、焼成は良好である。



第34図 SK 6出土遺物実測図



第35図 V区出土遺物
実測図(1)

5は底径5.9cmの凹底で、外面は縦位のヘラ磨き、内面はナデ調整で、色調は淡黄褐色、胎土に1mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

6は底径6.5cmを測り、平底を呈す。外面は縦位のヘラ磨き、内面はヘラ削り（下→上）、底部はナデ調整で、暗褐色を呈する。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

7は高杯の杯部で、数条の凹線をめぐらせた直立気味の脚柱をもつものと考えられる。体部は湾曲して斜め上方にのび、口縁端部は左右に拡張する。外面ナデ、内面は細いハケ状を呈すヨコナデ調整を施す。内面暗灰褐色、外面暗褐色を呈し、胎土には1mm以下の長石・石英粒を含む。焼成は良好である。

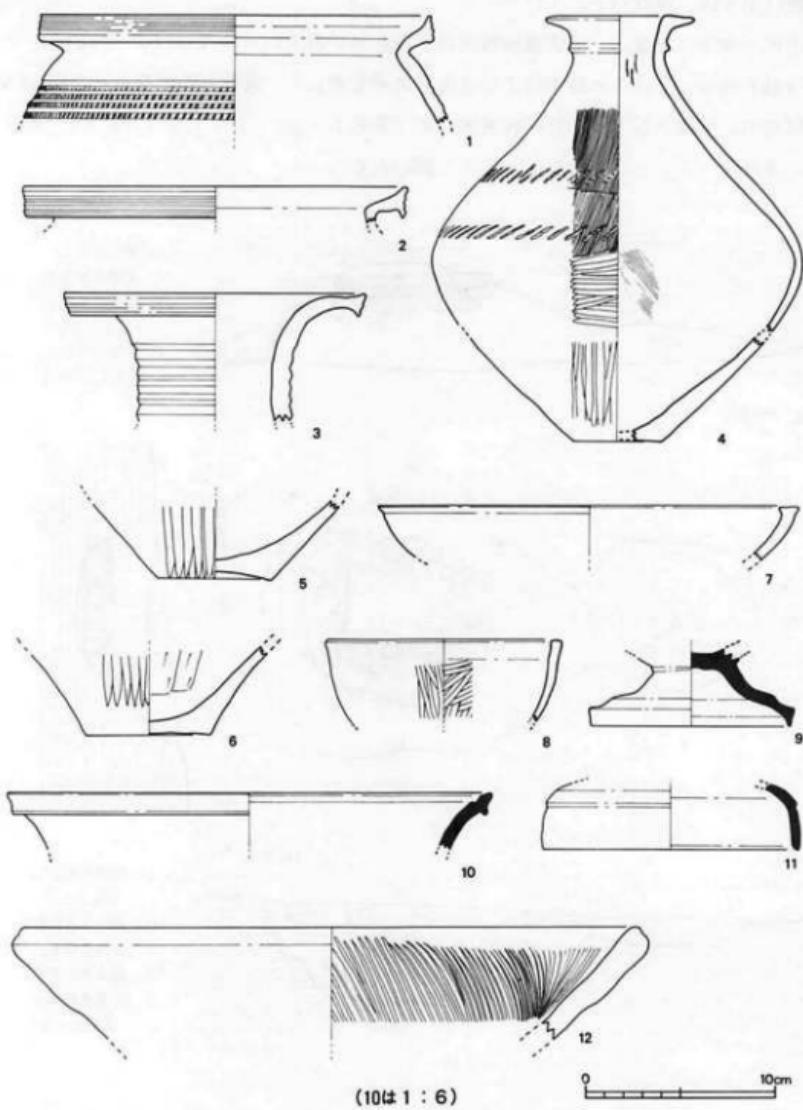
8は口径12.5cmの椀で、体部はやや湾曲しながら上方にのび、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともヘラ磨きで、色調は内面淡灰褐色で、胎土に1mm以下の長石・石英粒を含み、焼成は良好である。

9は脚径10.5cmの須恵器高杯の脚部である。柱状部は下方に向ってラッパ状に大きく開き、脚端部は直下し丸くおさめている。巻上げ・水引き成形で焼成は堅緻、色調は灰色を呈する。10は常滑焼の大甕の口縁部で、口径40.2cmを測る。口縁部は常滑焼によく見られる「N」字状口縁で、上下に拡張している

10は常滑焼の大甕の口縁部で、口径40.2cmを測る。口縁部は常滑焼によく見られる「N」字状口縁で、上下に拡張している。頸部は外湾気味に上方にのびる。内外面もナデ調整で、色調は灰色を呈し、外面に自然釉が付着する。胎土は1~2mm程度の石英・長石粒を含み、比較的精選されている。

11は須恵器の杯蓋で口径13.5cmを測る。天井部と体部の境には稜線をもち、体部は外傾して口縁部となり、端部は丸くおさめる。巻上げ・水引き成形で、天井部はヘラ削りである。焼成は堅緻で色調は濃灰色を呈し、外面には釉が付着する。

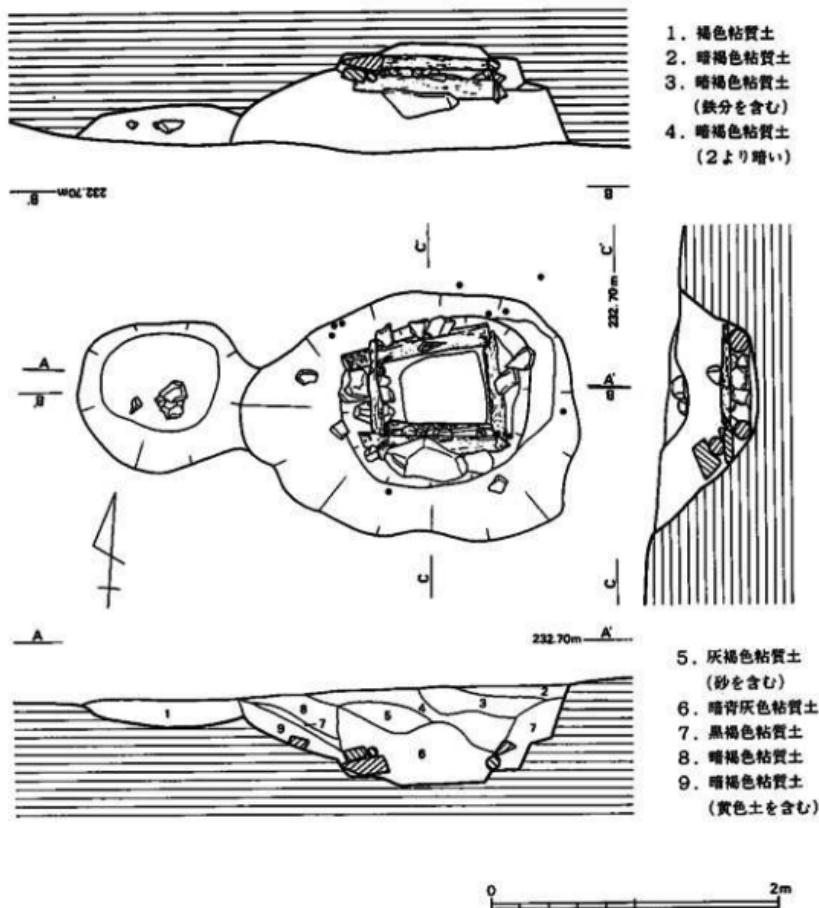
12は擂鉢で口径32.2cmを測る。体部から口縁部にかけて斜め上方に向ってほぼ直線的にのび、端部は矩形を呈する。口縁端面にはわずかに沈線が認められる。内面のカキ目は下から上に向けて密に入れられている。内面暗灰褐色、外面淡黄褐色を呈し、胎土には3mm程度までの砂粒を多く含む。焼成はやや軟弱となっている。



第36図 V区出土遺物実測図(2)

VII区(第4図、図版15-a・17-a)

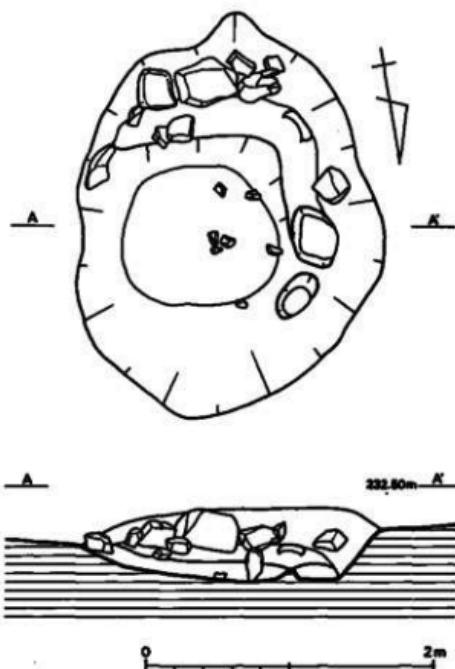
遺跡の南端に位置し、V区遺構検出面とのレベル差は約80cmを測る。本遺跡の中では最も高所にあるため耕作による遺構の削平も甚しく、遺物も殆どみられなかった。VI区検出の遺構としては、井戸状遺構2基(SE1・2)、土塙1基(SK7)、その他の遺構1(SX5)のほかに、ピット群がある。



第37図 SE1・SK7実測図

SE 1 (第37図、図版16-a・b)

調査区南西端に位置する。黄褐色土上面で掘方を検出したが、上部はかなりの削平を受けているものと思われる。検出時点において掘方南側に集中して20~50cm大の石を検出しており、おそらく井戸の御石に使用されていたものと考えられる。遺構掘方は上部楕円形、下部隅丸方形を呈する。規模は上部で 2.35×1.65 m、下部で 1.3×1.2 mを測り、検出面よりの深さは0.7mとなっている。方形掘方に沿って、内法 0.54×0.74 mを測る方形の障木を組んでいるが、西側では角礫を入れて障木のレベルを合わせている。南側では障木が2段造存しており、間に小礫を詰め東と西を杭で固定している。上段には 25×50 cmの石がありこのレベルから石組みとなっていたことが推測される。埋土は下部において暗青灰色粘質土となっており、水がたまっていた状況を呈する。障木の外側は黒褐色土で表込め石はなく出土遺物もない。



第38図 SE 2 実測図

SK 7 (第37図、図版16-b)

SE 1に切られ、その西に位置する。平面形はほぼ円形で、径1m、深さ0.27mを測り、断面は皿状を呈する。土塙中央より南側で挙大の角礫を底面より浮いた状態で検出した。埋土は暗褐色土で、遺物の出土はない。

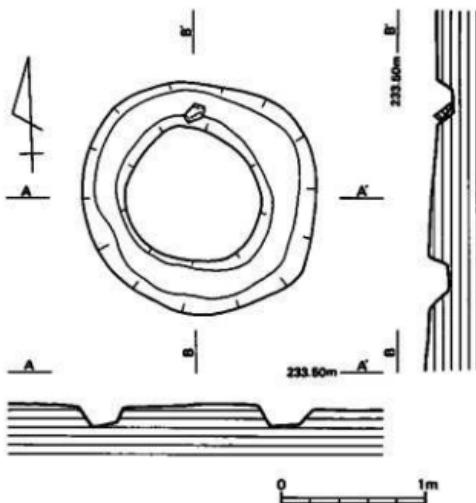
SE 2 (第38図、図版15-b)

SE 1の東方に位置し、黄褐色土上面で検出した。約30cmの耕作土下はすぐに地山となっており、上部はかなりの削平を受けているものと思われる。掘方の平面形は 2.1×2.7 mの楕円形を呈する。南側では幅約26cmのテラス面を持ち、底面は径1mの円形となる。遺構検出面よりのレベル差はそれぞれ

38cm、48cmを測る。南側では石を弧状にめぐらせており、底面はほぼ同レベルとなる。西側にも石の掘方が存在することから、本来は円形に石をめぐらせていたものと思われる。推定径1.5mの井戸状遺構としておきたい。埋土は暗黒褐色土一層のみ、遺物は出土していない。

S X 5 (第39図、 図版17-b)

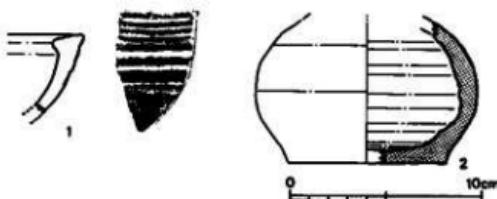
S E 2 の北東に位置し、黄褐色土上面で検出された。径1.6mの平面形を呈し、幅35~40cm、深さ15cmで断面逆台形を呈する周溝をめぐらせ、溝底はほぼ水平となる。周溝北側で拳大の角礫が検出されたのみで、周囲には当遺構と関連すると思われるピットも存在せず、時期・性格ともに不明である。



第39図 SX 5 実測図

VI区出土遺物 (第40図、 図版20)

1は高杯の杯部である。体部は外湾気味に上方にのび、口縁部は内外に肥厚する。外面には4条、口縁端部上面には3条の凹線をめぐらしている。内外面ナデ調整で、淡赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。2は常滑系の長頸壺と考えられるものであるが、頸部を欠失する。底径8.2cmを測り、内外面とも回転ナデ調整で、外面には緑色の自然釉が付着する。色調は淡灰色を呈し、胎土焼成とともに良好である。



第40図 VI区出土遺物実測図

V. まとめ

隠地上組遺跡の調査によって検出された遺構、遺物は以上の通りであるが、ここでは若干の問題点を述べることによってまとめにかえたい。

遺構について

今回検出した遺構のうち住居跡は5軒である。平面形が円形で6本柱のSB3はその出土土器から弥生時代中期末葉の所産と考えられる。平面形が円形に近い隅丸方形で2本柱のSB5もほぼ同時期のものと考えておきたい。類例としては庄原市本村町大原1号遺跡の第1号住居跡⁽¹⁾、同市七塚町大唱山第1号住居跡⁽²⁾などがある。また、福山市駅家住宅団地内の大塚谷・地蔵堂遺跡、手坊谷遺跡、池ノ内遺跡、深安郡神辺町御領遺跡においても同時期の類例がみられる。SB1からは出土遺物がなく所属時期を決めるのは困難であるが、その形態から一応、古墳時代と考えておきたい。SB2については土師質土器細片が出土しており中世の掘立柱建物と考えられるが、SB4については不明である。

SX1は埋土及び底面で炭化物を検出しており、性格としては2本柱の作業小屋のようなものが考えられる。その時期は出土の土師器からみて布留III式期併行としておきたい。

溝状遺構(SD1)は調査区の関係で完掘することが出来なかつたが、本来は東と西にのびていたものと思われる。溝の南側では、建物の規模は明らかにすることは出来なかつたが多数の柱穴群が存在しており、溝内では水が淀んでいた状況を呈することから、防禦的意味をもつ濠という性格も考えられる。溝底からは14世紀末~15世紀初頭にかけての擂鉢を検出しており、SD1もほぼ当該期のものと考えられる。

SE1は遺構掘方において上部楕円形、下部方形の平面形を呈する。遺構は下部において方形に組まれた陣木のみが遺存しており、上部における石組みは抜取られてしまったものと思われる。草戸千軒町遺跡における井戸の形態分類⁽³⁾では石組井側式のものがこれに當り、室町時代後期~安土・桃山時代の年代に比定されている。SE1からの出土遺物は皆無であり、その年代を決ることは困難であるが、遺構周辺からは当該期に比定し得る土鍋なども検出しており、当遺構もほぼ同期のものと考えておきたい。

その他の遺構としては、弥生土器底部を検出したSK1がある。遺構の形態から土塙墓の可能性が考えられ、時期としてはほぼSB3・5に併行する年代が推定される。

なお、柱穴群については明確に年代を決定することはできないが、周辺より出土の遺物から14世紀～15世紀を中心とする数10軒の掘立柱建物が存在していた可能性が考えられる。

出土遺物について

遺構に伴う遺物は殆どなく、耕作土、包含層より出土したものが多数を占める。内容は弥生土器、土師質土器が大部分で若干の石器、須恵器がみられる。

弥生土器は調査区の西と東で緩かに傾斜する谷部に堆積した黒ボク上層から出土した一括遺物である。その特徴からみて三次市の塩町遺跡出土のものと同形式であり、本遺跡出土の土器も弥生中期末葉に比定されるであろう。土師質土器は量的にみると擂鉢・土鍋の類が多く、皿類は少い。

以上のことから、当遺跡は弥生時代及び中世を中心とした集落遺跡と考えることができる。遺跡周辺では同時代の調査例が少く、その性格を決定するのは難しいが、弥生時代住居跡については、山間の谷水田を生活の基盤として短期間に営まれた小集落と考えられる。また、中世では遺跡周辺に多くの山城が存在しており、この地域の中世社会をになう集落の存在が考えられる。類例は少いが⁽⁶⁾、庄原市本郷町滑谷遺跡において中世の館跡が検出されており、今後類例の増加によりさらに詳しく検討されることが望まれる。

(注)

1. 広島県教育委員会「大原1号遺跡」「中国縦貫自動車動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1)、1978年
2. 広島県教育委員会「大唱山古墳群」 同上
3. 広島県教育委員会「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」1976年
4. 広島県教育委員会「神辺御領遺跡」1981年
5. 小都隆「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第26巻・3号 1979年
6. 潮見浩「山陽地方I」「弥生土器集成・本編I」1964年
7. 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター「滑谷遺跡」1983



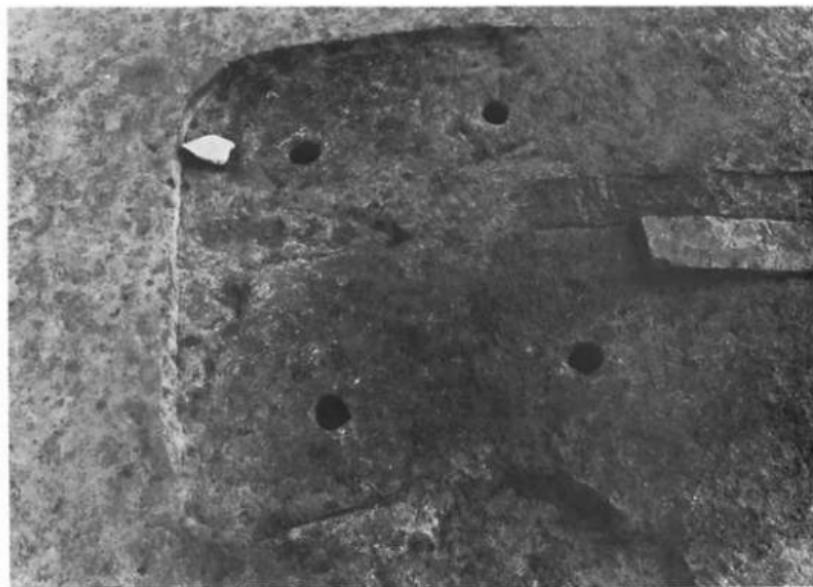
a. 遺跡遠景（北より）



b. 遺跡近景及び調査状況



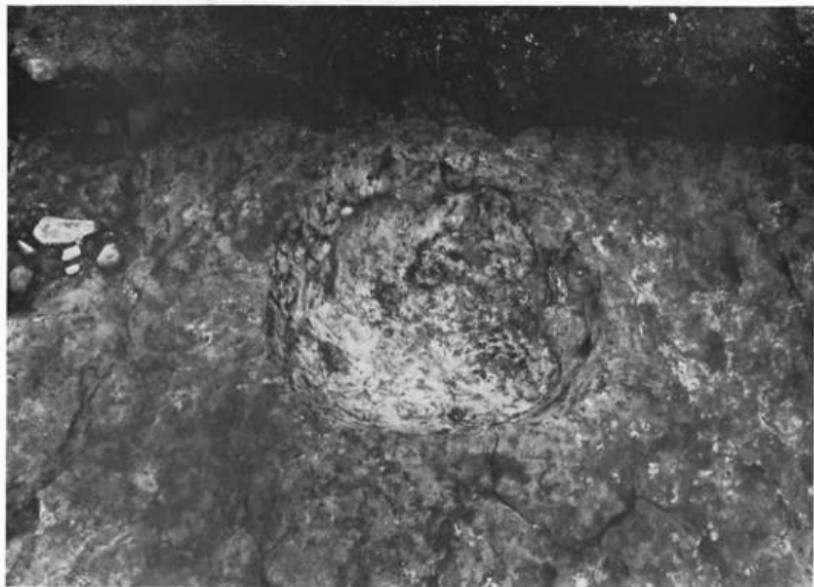
a. I 区東半部完掘状態（東より）



b. SB1 (北より)



a. SK 1 (北東より)



b. SK 2 (北より)



a. I 区西半部完掘状態（西より）



b. II 区完掘状態（南より）



a. III区南西半部完掘状態（東より）



b. SB3（北西より）



a. SD 1 土層断面（東より）



b. SD 1 (西より)



a. SD 1 集石及び遺物出土状態（南より）



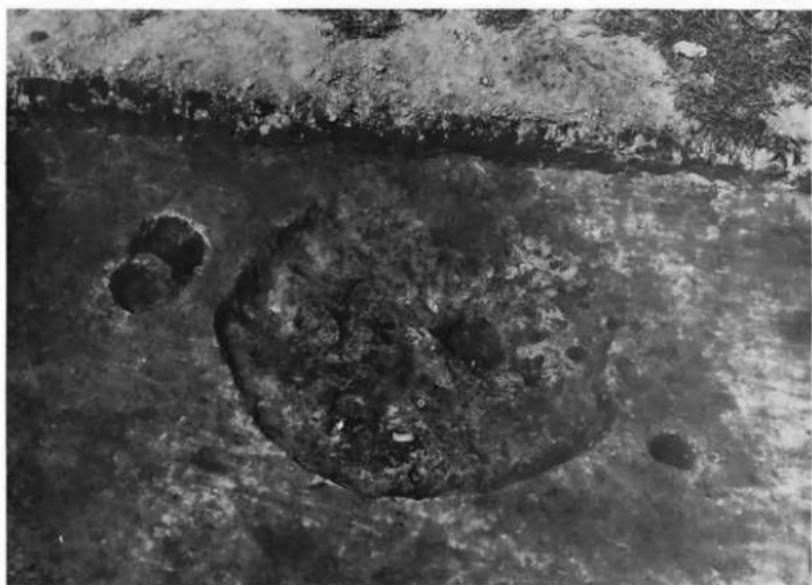
b. III区北東半部完掘状態（北東より）



a. IV区北半部完掘状態（北より）



b. IV区南半部完掘状態（北西より）



a. SX 1 (南より)



b. SX 2 (北東より)



a. SB 4 (北西より)



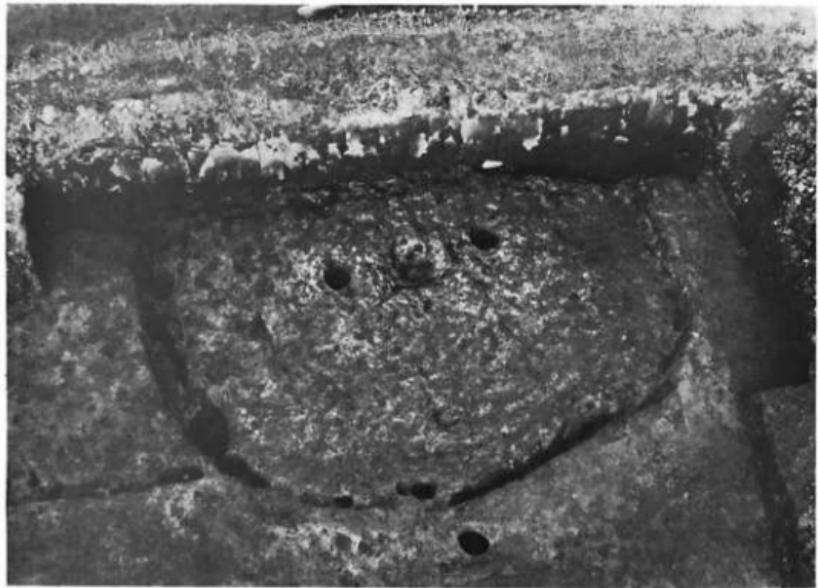
b. SX 3 (北西より)



a. V区北西半部完掘状態（北西より）



b. 調査状況



a. SB 5 (南より)



b. V区柱穴群 (北東より)



a. SK 5 (北西より)



b. SK 6 (南より)



a. V区南東半部完掘状態（南東より）



b. SX4（南西より）



a. VI区北西半部完掘状態（北西より）



b. SE 2 (北より)



a. SE 1・SK 7 調査状況（東より）



b. SE 1・SK 7 (東より)



a. VI区南東半部完掘状態（北西より）



b. SX 5 (北西より)

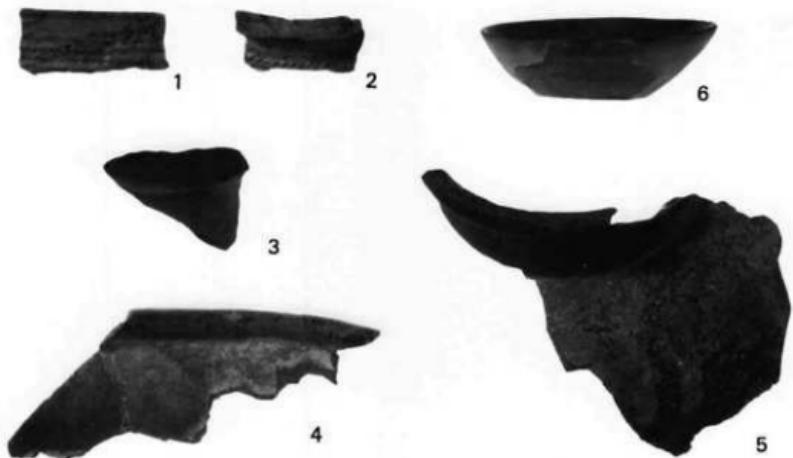


出土遺構名

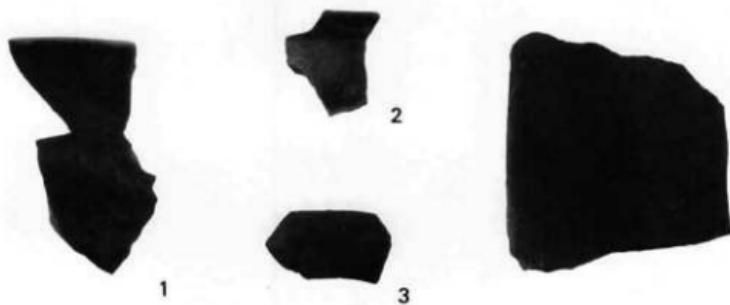
SB1	SB3		
SB5	SK1	SX2	SX3
SK6	SX1		SX4
SX1	SD1		



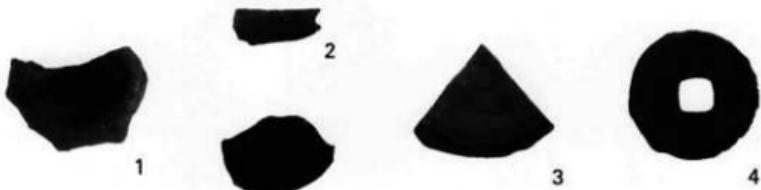
各遺構出土遺物



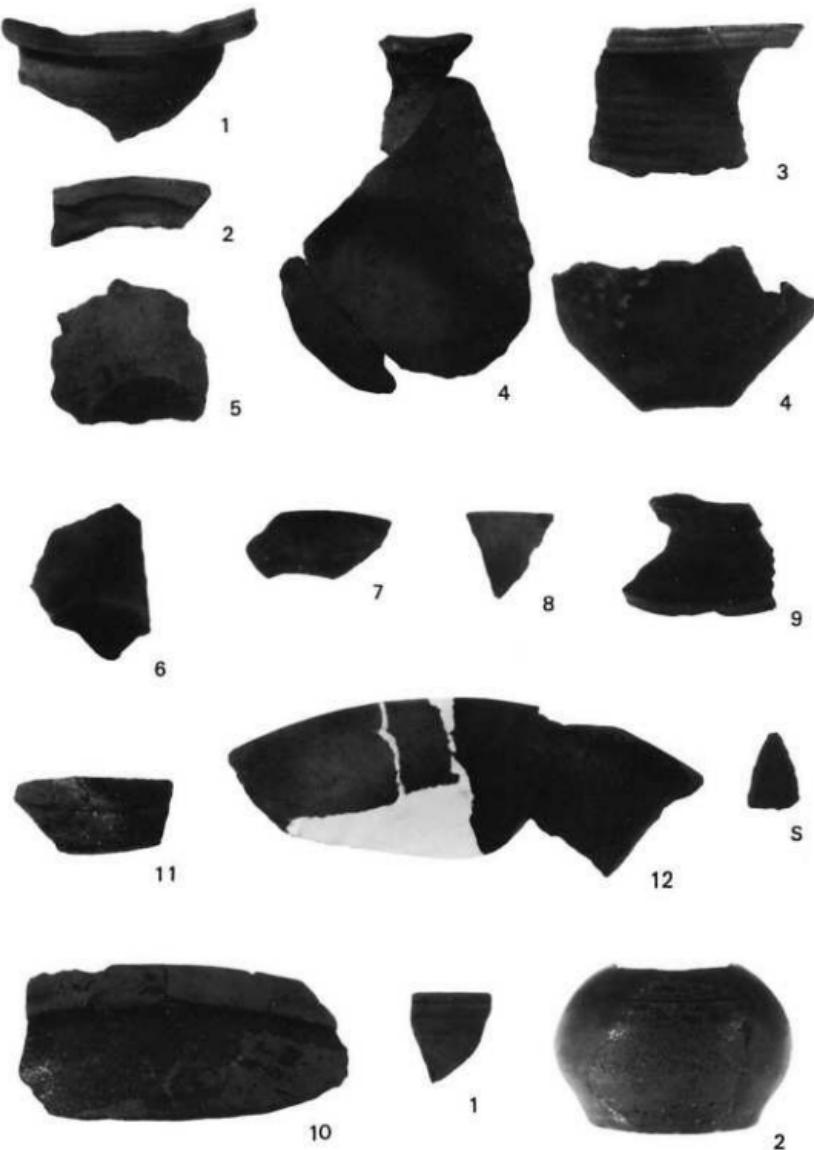
I区出土遗物——



III区出土遗物——



IV区出土遗物——



V・VI区出土遺物（Sは石鎌・右下1、2はVI区出土）

隱地上組遺跡

——庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業(木戸工区)
に伴う発掘調査報告書——

昭和59(1984)年3月

編集・発行 (財)広島県埋蔵文化財調査センター
印 刷 中 本 総 合 印 刷 株 式 会 社